

意味ある人をつくるために

人づくり百年の計委員会 提言書

平成11年10月20日

静岡県人づくり百年の計委員会

目 次

はじめに - 「意味ある人」をつくるために.....	1
これからの人づくりに向けて.....	5
1 子どもと家庭.....	5
(1) 美しく挨拶しよう.....	5
(2) 美しく歩こう.....	6
(3) 美しく話そう.....	7
2 子どもと学校.....	10
(1) きれいな学校.....	11
(2) 気持ちのいい生徒.....	11
(3) 頼もしい先生.....	12
3 社会と人間.....	15
(1) 自分を磨く.....	15
(2) 自然と生きる.....	18
(3) 人と出会う.....	19
むすびの言葉 - 順序と時間のために.....	20

はじめに 「意味ある人」をつくるために

「人づくり」あるいは「人材育成」は、いつの時代、どの民族社会でも、目標とされてきました。それは人間の精神作業の中で次元の高い目標であるからです。「観光」という言葉の原義は「人材がどこに居るか、見て歩く」という意味です。

いま、私たちが静岡県の中で「人づくり」を考え、そのためのシステムや装置を作ろうとしている背景には、人間の「生き方」(Matter of Principle)について、地球規模の変化が生起しかつ進行していること、また日本の社会の中で人間の成長にとって息が詰まるような構造が出来上がってしまったこと、この2点があります。

それでは、「人づくり」の視点をどこから始めるか。かなりの数の人が知っているように、私たちは「ものの見方」の中で「枠との関係をかえて見る」方法(Frame of Reference)を学んでいます。

航空機の操縦に例をとりましょう。離陸してから空中で水平安定飛行をするためには、パイロットは窓の枠の外にある風景(たとえば地平線)をスタンダードにして、地平線が左に上がっていれば乗機は左に傾いていることを認識し、乗機の姿勢を直します。飛行を終えて着陸するときは窓の枠には一直線の滑走路しか見えません。この滑走路になるべく小さな衝撃で着陸するためにはパイロットはコックピットの中の計器を加減してゆきます。

いま、地球社会の変化に対応し、新しい世紀にいきいきした、小さくても存在感があり、他者を思いやる心を持つ人、ひとくちに言えば「意味ある人」(Significant Person)をつくるための「知恵の航空機」の窓枠に見えている風景はなんでしょうか。

戦後50年の間に形成された「大衆社会」の歪みです。日本では「中間階層社会」という呼び方もありますが、いずれにせよ、社会の性質にかわりありません。この社会の特質は、価値尺度が「善か悪か」「正か邪か」から「損か得か」「楽か辛いか」に移行したと言われてもいますが、私たちが日常的に感じていることをオルテガとかホイジンガーという社会学者の言葉をかりて表現すれば「社会の構成員に権利意識はあるが義務の意識がない社会」であり、したがって「誰もがやりたい放題にやる社会」ということになります。

何が間違っていたのでしょうか。経済優先主義を元凶とする意見もありますが、経済成長には社会資本の充実、弱者救済、他国への援助など、余資によるメリットのあることは否定できません。ただ、ここで立ち停まって考えたいことは、「何が間違いの原因であったか」との設問に対して、私たちはいつの間にか、政治が悪い、経済が悪い、教育が悪い、と自分以外のところで「犯人探し」をする癖がついてしまいました。これは「他罰性」という一種の性格的な偏りです。むかしの人は「省みて恥なきか」という言葉を日常生活の中で使っていました。そうです、私たちひとりひとりが生活が豊かになるにつれて、自己完結的な自分だけの宇宙をつくったり、子どもの心の世界とつきあわないで自分勝手な願望を押しついたり、人間の価値をその人の「生き方」に見ないで外面的な地位だけで評価したりしていないのでしょうか。その結果、日本人として生まれたら最後、まだ沢山の人生時間を持っているのに、自分の将来を見通してしまうような錯覚に陥り、若いときからダム・ダウン(なるべく目立たぬように平凡に暮らそうとする傾向)を選択したりする人を作ってしまった。

私たちがこの50年間の上昇過程で窓枠の外に見てきた地平線は、以上のように、ひっきりなしに揺れてきました。その揺れに対して、私たちはさまざまな調整を行ってきましたが、調整をすればするほど揺れはひどくなり、とうとう人格形成の初歩の段階で「学級崩壊」や「学力低下」といった危険信号が灯るようになったのです。

思えば、私たちは間違った目標にむけて離陸したようです。窓の枠の外に見た民主主義という地平線は虹か陽炎(かげろう)のようなものであったに違いありません。ほんとうの、民主主義は「自由」「平等」「博愛」の3つの理念で成り立つものではなく、「自由」には「責任」、「平等」には「区別」、「博愛」には「厳罰」という概念が伴ってこそ、ほんとうの民主主義社会が出来るのであると、西田幾多郎哲学博士は寒風の吹き込んでくる京都大学の講堂で終戦直前に講演をしています。

おわかりのように、私たちがこれから着陸しようとする滑走路は「自由・責任」「平等・区別」「博愛・厳罰」という6つの概念で出来た静岡県なのであります。この着陸を可能にするためには、家庭が教育の基礎であることの自覚、勉学が好きな子にはそれなりの器を用意し、自己表現を望む子にはそれなりの支援装置を用意する、また「人づくり」は人間の発展段階に応じてプログラムをつくり、このプログラムごとに

家庭・教育・社会が連繋してあたる。その具体的な提言については、各論をご覧になれば、私たちが、私たち自身のつくった「大衆社会」のクビキに別れを告げ、その自己回復の過程でどんなシステムと装置を用意する必要があるか、一目瞭然だと思えます。ただ、そのシステムや装置を動かす運動体の理念を申し上げれば、次の3点です。

- ・ みんなの子ども
- ・ みんなの人材
- ・ みんなの静岡

私たちは曼陀羅の絵図の中に、知恵の無限の連帯を見ることを教わってきました。コンピューター・ネットワークのコンセプトも曼陀羅のコピーであったと言われてから十年ほどになりますし、最近では人間の身体の中の情報伝達も無限の連繋動作が可能にしているものではないかとも言われています。

しかし、どのように精巧な曼陀羅、あるいは集積回路でも、起動する一点がなければ全体は機能しません。起動する一点、それは「いま、できること」です。できることから始めればよいと思えます。

たとえば、各家庭で照れたり恥ずかしがったりせずに挨拶を交わすことから始めましょう。挨拶は「心をひらく」という意味、「挨拶」は相手に「近づく」という意味です。

家庭では「おはよう」「いただきます」「ご馳走さま」「ただいま」「おやすみなさい」。この5つの言葉を、はっきり、美しく言う習慣をつけさせる。なぜ、それが必要かと言えば、言語を明確に使うということは、論理的訓練の基礎になるからです。日本人は「英語が下手だ」といわれていますが、その基本的な原因はいい加減な日本語を日常的に話しているからです。

はっきりした言語は、はっきりした動作を誘発します。美しく歩くようになります。そういう子どもたちが学ぶ教室はきれいになるに違いありません。

以上のようなことを「躰」と固苦しく考えず、「きれいになるうよ」を標語にして、各自治体の中でコンクールをしてみてもよいでしょう。審査員には本県出身の表現芸術家（音楽家・画家・作曲家・演奏家・俳優・デザイナー）をお願いしてはどうでしょうか。

そして最後に強調しておきたいのは、海・山・川・湖と、見事に揃った自然の力を

お借りすることです。この偉大な物言わぬ教師たちによって、子どもから大人まで心身の回復や増強を図り、自然と自分の接点で何が見えてくるかを設計し、高校生の段階から自然浄化の情念を養うこと等を推進したいと考えます。

静岡県ほど、意味ある人生を送るための条件が揃っているところはありません。かつて日本人は、「気枯れ（けがれ）」から自分を回復するために熊野に集まりました。元気になると再び自分の故郷に帰って活躍しました。公卿も武士も農民も陶工もそういう経験を持っています。静岡県は、人材の育成地であると同時に、人生の第2回戦を戦う気力と体力と技術力を身につけられる土地でもあります。

いま、ここに新しい目標にむかって提言する所以でもあります。

これからの人づくりに向けて

1 子どもと家庭

- 美しく挨拶しよう 美しく歩こう 美しく話そう -

これからの「子育て」は、もっと家庭できびしく“しつけ”ることから始めなければならぬと、いつも家庭の子育て機能を回復させることが強調されます。しかし近年、家庭の中で大人の価値観がゆらぎ、大人の権威が弱くなってきていますから、家庭で子どもをもっときびしく“しつけ”るということは、とても困難な課題です。

とはいえ、家庭の“子育て”機能を可能な限り回復させなくてはなりません。“しつけ”ということのを避けて通るわけにはいきません。

“しつけ”というのは、『広辞苑』を見ますと、「“躰”とも書く」とあり、「礼儀作法を身につけさせること。また、身についた礼儀作法」という意味に続いて、「縫い目を正しく整えるために仮にざっと縫いつけておくこと」という意味が出てきます。ここまで戻れば、“しつけ”ということとは“美しい”という価値感と関わり、その到達目標に向かって“仮にざっとしておく”ことであるということが分かります。何も“きびしく”しなくても、家族みんなが“美しい”ということを楽しく模索しながら、“しつけ”は社会全体で仕上げていけばよいと気楽に考えて、その“美しい”という方向に“仮にざっとやってみる”ということで「家族関係」を強めながら、みんなが“しつけ”の静岡方式を創り出そうではありませんか。

“しつけ”の静岡方式を創り出せるよう、次の3つの柱をたてて考えてみたいと思います。

- (1) 美しく挨拶しよう
- (2) 美しく歩こう
- (3) 美しく話そう

(1) 美しく挨拶しよう

ヒトは“社会関係”を発展させながら、ますます人間に発達してきました。この“社会関係”の基本単位は「家族」です。まだ、しゃべれない赤ちゃんにも、目と目を合わせて、コトバで美しく挨拶をしましょう。そのコトバを聞いた後には、必ずいいこ

とがある、ということが分かれば、この大人からの美しい挨拶のコトバを聞いて安心し、家族の絆（きずな）の糸が太さを増していくでしょう。この安心感から、成長の「糧」である子どもの“いたずら”が広がり、さらに“好奇心”や“探求心”がふくらんでいくでしょう。

また、大人から美しい挨拶をされて、子どもは自分が大事にされているという感情が生まれ、「自尊心」が育っていくでしょう。

そして、大人の美しい挨拶を真似して、子どもも美しい挨拶ができるようになっていくでしょう。家族の中で“美しい挨拶”を交わしながら、「社会的知性」と「感情的知性」を発達させ、さらに人間らしい「自己意識」と「自己制御」との知性（あわせて「自我」といっている）を可能な限りふくらませたいものです。

(2) 美しく歩こう

最近の若者がどんなところにも座り込んでしまう「ジベタリアン」のことがいつも話題になります。そういう若者にどうしてそんなところに座るのかを尋ねてみると、「別に疲れているからどこにでも座るのではなく、若い“いま”しかできない自己表現を精一杯しているのだ」と答えます。若者の“体力”が低下している訳ではないのです。

大人が若者に「最近の若者は躰がなっていない」と嘆いても事態は変わりません。若者が“乗る”「自己表現」の別のテーマを大人から今まで提案してこなかったことに気がつきます。

ヒトは動物の中で、からだの“重心”が最も高い動物です。ですから、最も“人間らしい姿勢”というのは、重力圏内で最も不安定で、不自然な“重心”の高い姿勢ということになります。このような無理な姿勢を選択して、ヒトは人間に進化してきたのです。進化の逆戻りはできませんので、この方向にさらに発展させる課題、目標を設定するしかしかたがありません。

では、もっとも“人間らしい立居振舞”はなんでしょう？「美しく歩こう」はその一つのテーマです。家族の中で、「美しく歩く」というテーマで大人が“仮にざっとやってみる”サンプルを示し、家族なりの「作法」を家族みんなで作り上げていっ

てはどうでしょうか。

子どもの「身体運動的な知性」は、このようなところからふくらんでいくでしょう。

(3) 美しく話そう

アメリカでは、子どもたちに国語の力をつけようと、莫大な費用をかけて「セサミストリート」というテレビの番組を作っています。ところが、番組の内容について子どもの質問に答える大人が傍にいる子は国語の力がついていくようですが、テレビを一人で見ている子は番組の展開が早くて内容が分からず、国語の力がつかないことが分かったそうです。

子どもたちにせっかくのテレビ番組を作っても、テレビを見る家庭の環境によって「言語的知性」が発達できない場合がありますが、この結果“思考力”が衰え、そして、“やる気”がしぼんでいくことが、とても心配されています。

毎日のテレビ漬けの生活から、子どもを引き離し、しっかりとした「日本語」を身につけさせることは、正に家庭の役割です。まず、さまざまな分野の作品を「読み聞かせ」るために、家庭で大人が子どもに毎日30分を割くことができないでしょうか。近所の子どもたちを集めて「紙芝居」をするのもいいかもしれません。

日本語の美しいひびきや表現を、まず大人が楽しみ、その楽しさを子どもに伝えながら、コトバでイメージを作り、それを持続する“集中力”をつけさせたいものです。

日本では江戸時代に、「素読(そどく)」という塾での教育方法がありました。意味が分かって、分からなくても、大声を出して、文章を読む、という方法です。“目”だけではなく“耳”も“発声器官”も使い、あるいは書き写しながら“筋肉感覚”も動員した日本語の学習方法を活用して、美しい日本語を身につけ、“仮にざっとやってみる”方式で家庭内で美しく話すことに積極的に挑戦してみてはどうでしょうか。

毎日10～30ページの読書で、大人も子どもも「言語的知性」をさらに発達させることができるのではないのでしょうか。子どもが自分のこと、社会のことについてしっかりと「意見を表明する力」をつけるためには、このような挑戦の積み重ねが必要でしょう。

(4) 21世紀に向けての提案

家庭での子どもの“しつけ”を静岡方式でやるとしても、その前後にいくつかの条件を整えなくてはならないでしょう。“美しい”という価値感が出ない場合には、「からだの不調」の原因をつきとめ、「保養」をして、しっかりと生活ができる「からだの力」を回復させる必要があります。さらにその力を、地域の力も借りて次第に高めていくことが必要でしょう。

子どもの「からだの不調」の原因をつきとめる

子どもが朝から生き生きと生活できないとすれば、それには必ず原因があります。それを「心」の問題として片付けてしまわないで、原因として予想されている“物理的環境”“化学的環境”あるいは“文明的環境”“文化的環境”、さらには“少子の環境”のどれが最も主要な原因かを突き止め、対策をとることが必要です。

とりあえず、たとえば公立の臨床環境医学センターを作り、「クリーンルーム」を設け、子どものからだと心をおかしくさせている有力な原因の“有害化学物質”の正体を突き止めることができれば、5人に2人が訴えている「からだの不調」の問題の半分は解決できるでしょう。(あとの半分は によって解決できるでしょう。)交通の便がよい静岡県にできれば、日本中から利用者がたくさん来るでしょう。

また、このセンターを中心にして疫学的な調査に取り組めば、年々増え続けて、今や3人に2人にまでなってしまった「視力不良」の原因を追い詰めることができるでしょう。

このようにして学校保健の三大問題(むし歯と「視力不良」とアレルギー)の2つが解決できる糸口をつかまえることができれば、日本の臨床環境医学にとっても大きな成果になるでしょう。

このような作業を積み重ねれば、世界的に期待されている「子どもへの被害を規準とした環境基準」を、このセンターで明らかにすることができるでしょう。

自然の力を利用して、子どもの自然治癒力の回復と向上を図る

子どもたちが、“朝から生き生きとした生活”ができる、ということは、からだの調子が朝からよく働くようになっており、防衛体力がついているからです。このよう

なからだの調子を狂わせる原因については、 の取組で解明できるでしょうが、その後は、その原因から遠ざかり、自然治癒力の回復と向上を図る必要があります。幸いなことに、静岡県は豊かな自然に恵まれています。海岸での潮風と海水、また山林での森林浴と清らかな水、さらには様々な温泉を利用して、少なくとも3週間程の「保養」が安価にできれば、そしてこの子どもの「保養」に保護者が付きそう場合には、企業や自治体で「子どもの保養休暇」制度を作ってくださいと安心して保養ができます。

この「子ども保養センター」は、海岸や山林の小学校の使用されていない教室を拠点にできればいいでしょう。テント生活をして、朝から朝日を浴びて、交感神経が次第に働き出してくることを体感し、自然の中で様々な体験をして、ゆったりと、のんびりと時を過ごし、空腹感を味わい、気力の充実を待ちます。勉強がしなくなったら、教室にいる先生に教えてもらったり、また養護教諭にいろいろなからだの調子の変化を話したりして、「自分のからだの調子が分かること」(自己意識)と「からだの調子と生活との関連が分かり、生活のどこを変えてみようかという計画をたててみること」(自己コントロールの始まり)を中心にして、「保養ノート」をつけていきます。

ここでの成果を蓄積し、県内に、また全国的に広めていけば、静岡県の子どもばかりでなく、日本中のからだの調子がおかしくなって困っている子どもにとってうれしい便りとなるでしょう。ここでの「保養生活」は学校での出席日数に数えてくださると助かります。この「保養センター」の利用料は、できるだけ公的な補助を多くしてくださいとベストです。

地域で父親が参加し、「子どもの出番」があるイベントを作り出す

子どもたちのからだの調子が整い、防衛体力が高まってくると、子どもたちには様々なことに挑戦してみようという意欲がでてきます。子どもたちに地域や企業で子どもたちが生き生きするような「出番」を作ってくださいとありがたいのです。

地域のお祭りやイベントには、必ず子どもの出し物を作ってやってください。少子化の時代ですから、社会的に“兄弟・姉妹”を作り出し、“ガキ大将”や“おてんば娘”が育つように手助けしてください。また、元気な子どもたちにつられて、大人も

地域でつながって、子どもの盛り上がりを助けてください。特に、このような場合、父親の出番が期待されていますので、父親を家庭に、地域に返すよう、企業や自治体・国が支援してくださるとありがたいのです。

地域のイベントが盛り上がらなくて苦しくても、安易になくさないで、もう少し頑張ってみてください。住民の健康にとって、日本の「祭り」がもっている意義が、今、国際的に注目されているからです。

2 子どもと学校

- きれいな学校 気持ちのいい子ども 頼もしい先生 -

子どもは「もっとやってみたい」「感動することに出会いたい」という希望を持っています。夢を育み、実現させていくために、大人や学校はどのような手助けができるのでしょうか。

子どもは体験を通じて学習をします。子どもの成長の過程の中で、例えば遊び、冒険、スポーツ、地域の祭り、伝統芸能などの様々な場面で、ごく自然に夢を膨らませてきました。

今、学校は、地域の様々な活動と連携し、そこにいる人々の能力を生かしながら、子どもに多くの体験をさせてみましょう。子どもの夢や希望は広がり、その中から自分の興味やこれからの方向を探し出していけるだろうと思います。

学校で何より重要なことは「子どもと先生」の関係です。子どもは夢を形にするため、先生に聞いてほしいことや相談したいことがいっぱいあります。希望や夢をかなえるための水先案内人は先生でしょう。先生が忙しすぎるのは問題です。ですから、先生のエネルギーを十分に授業や子どもと接する時間に費やせるようにし、子どもと真剣に向かい合うことによって、先生は子どもにとって頼もしい存在となり、子どもとの信頼関係を深めるでしょう。

子どもは学びや体験、先生や友達との関係を通して、自分の存在を知ることができ

ます。そして「自分らしく」「個性的に」生きること、「自分らしく生きる」ためには、自由と責任が背中合わせであることも知ることができます。

教師の積極的な姿勢の中で子どもの確かな成長が生まれ、学校は子どもたちの誇りに支えられた「みんなの学校」に生まれ変わります。

ここでは、次の

(1) きれいな学校 (2) 気持ちのいい子ども (3) 頼もしい先生
から考えてみたいと思います。

(1) きれいな学校

最近、コンビニ等で買った飲食物の空き缶や袋が投げ捨てられている光景を目にします。また、道路の脇の緑地帯にはビニール袋や空き缶が排気ガスにまみれながら、うち捨てられている光景もあります。心ある大人が子どもや若者のマナーの悪さを他人ごとのように嘆いていても問題は解決しません。まず、自分自身が少しずつ身の周りから改善してみましょ。我々大人が街をきれいにする姿勢を子どもに見せれば、子どもの行動も変わってきます。

かつて、学校は地域のシンボルとして、地域の行事や放課後、休日の子どもの遊びの場として、住民にとって身近で愛着のある存在でした。学校は地域の人によって支えられ、地域を誇りでもありました。大人が、「地域の学校」で「地域の子ども」を育てるという気持ちを持つことは大切です。学校も地域の力を積極的に受け入れれば、「学校の役割」を今以上に果たすことができます。まさに、「地域が変われば学校が変わる」「大人が変われば子どもが変わる」こととなります。

地域に支えられた学校は、教育力を回復させ、子どもたちを生き生きとさせ、気持ちのいい「きれいな学校」になるでしょう。子どもにも「自分たちの学校」という意識が生まれ、感謝の気持ちや道徳心が育っていくと思われま。

(2) 気持ちのいい子ども

自分に自信を持ち、自らの目標に向かって主体的に活動していて、そのうえに感謝の気持ちを表す「ありがとう」が自然に言えるような、思いやりのある子どもは気持

ちがいいいものです。

こうした「気持ちのいい子ども」を育てるためには、どろんこ遊びをしたり、取っ組み合いのけんかをしたり、自然の中を冒険するような豊かな経験をさせることが大切です。子どもは学校や地域での体験を通じて、他者の成功を自らの喜びとして感じることを学習していきます。

大人は愛情に満ちた肯定的なメッセージやアドバイスを子どもに与えましょう。また、学校や地域が様々な個性をお互いが許容して、様々な個性を持った人間を包み込んで生きていくという社会を創り出していくことが大切でしょう。

(3) 頼もしい先生

子どもにわかる授業をする先生、心に残る先生が数多く生まれることが望まれています。学校には様々な課題がありますが、教師は、基本となる教育の重みや期待の大きさをしっかりと理解して、一つ一つの問題を確実に解決することがますます必要になってくるのではないのでしょうか。

子どもにとって「頼もしい先生」とは、厳しさと優しさはもちろん、子どもに夢やロマンを与えてくれる先生です。教師は、自らの専門性や知識、指導技術を高めるとともに、多くの機会を利用して様々な体験に挑戦し、自らの感動を子どもたちに伝えていってほしいと思います。さらに、子どもとの具体的な関わり方に関心を持ち、工夫をすることも大切です。

こうした努力によって、子どもの可能性を育て、また、学校の課題を確実に解決する「頼もしい先生」が生まれてくるのではないのでしょうか。

(4) 21世紀に向けての提案

きれいな学校コンクール

子どもには発達のプロセスに応じて道徳心やルール、マナーなど社会性を育むことが大切であり、子ども自身が楽しみながら、向上心を持ってそれらを身につけていく工夫が必要です。

そのためには、家庭や学校だけでなく、地域の大人が立ち上がり、地域が動き、地

域の子どもとして、子どもを育む姿勢が望まれます。

きれいな学校や気持ちのいい子どもを表彰する「きれいな学校コンクール」を開催したらどうでしょうか。幸い、静岡県には様々な分野で活躍する感性豊かな芸術家が住んでいますので、音楽家、画家、漫画家、作曲家、演奏家、デザイナーの皆さんで学校探偵団を組織して、「きれいな学校」探しをします。子どもは、きれいな学校を目指して、楽しみながら競い合い、学ぶ場の環境整備に参加できます。「責任」「義務」を大人からの押し付けではなくとらえ、そのことから、「きれいな学校づくり」に子どもが仲間と協力しながら自発的に取り組むこととなります。

子どもたちへの「生き生き」体験機会

子どもには、それぞれの年齢に応じた、様々な体験をさせていくことが必要です。子どもが大人と一緒に遊びながら、安心していたずらや取っ組み合いができたリ、地域の中で育児や福祉、職業体験等ができる場をたくさん作っていききたいものです。

静岡県には豊かにそろった自然がありますから、この様々な自然を生かして取組を考えていくのもいいでしょう。例えば海、かつての典型的な取組といえば遠泳がありましたが、復活させてみたらどうでしょう。どこでもできるわけではありませんから、希望する子どもがそこに行けば体験できるように遠泳体験の拠点を作ってみてはどうでしょう。

このような貴重な自然体験は、少数の学校や地域の取組だけに留めないで、希望する全国の子どもが体験できるようにしていただくと、どんなに素晴らしいことでしょうか。

個性ある子どもを伸ばすための教育システム

勉強が好きな子どもには思いきり勉強できる環境、自己表現を望む子どもにはその実現を支援する環境を用意することが重要です。

優秀な研究者や日本を代表するエコノミストになりたいと希望を持ったり、一流の音楽家や画家、スポーツマン等を希望したり、専門的な知識や技術の習得を求めることは、子どもの素直な気持ちの中から生まれます。子どもの能力を十分に伸ばすため

の教育システムが考えられないでしょうか。

こういった子どものニーズに応じるためには、一人一人の個性・能力・資質に応じた高度な学識や技術を育てる様々な学校が望まれます。そのため、既存の学校の充実に加えて中高一貫教育校や、芸術家、スポーツマンを育てる学校の設置も考えられます。

さらに、校長の権限拡大の流れにそって、校長が明確な教育方針を立て、それに共感する意欲ある教師を幅広く公募・起用し、意欲ある子どもの入学を受入れるシステムも取り入れられないでしょうか。

個性や魅力のある子どもを育てるためには、子どもと正面から向き合って関わる時間が必要となります。学校での教師の仕事の中身を一度点検して、教育に専念できる体制づくりを工夫してみましょう。

魅力ある専門高校

21世紀を担う職業人の養成は大切なことであり、専門高校の個性化が一層望まれます。子どもが「この学校に行きたい」という魅力を感じ、入学後は、生きがいを持って将来を展望できる様々な選択肢が用意された専門高校が望まれます。子どもが元気になるようなコースとカリキュラムを用意した学校を、名称も含めて検討してみましょう。これらの学校の教育方針が、地域に根ざした文化や自然、風土や産業と関わっていれば、地域との一体感が生まれ、子どもの希望と一致してきます。

水産高校を「ブルーマリーンスクール」に変えたらどうでしょうか。カリキュラムの中に、ヨットやスキューバダイビングを取り込んだ教育をし、漁業や海洋レジャーのインストラクター、ライフセーバー（水難救助員）の職業につながる可能性も用意しておきます。

また、林業高校でボートやカヌー作りができるようにしたらどうでしょうか。森林から切り出した木を利用し、地元の企業技術を活用し、木の素材や加工の技術を学びながら、ボートやカヌー作りをする学校です。外国から講師を招聘し、外国語での技術教育を受けながら、国際性も身につけます。

農業高校では、例えば環境浄化を大きな教育方針として、土壌等の農業素材の安全

性、食材の生かし方や調理方法を学んだり、国内外での体験学習をさせてみるのもよいでしょう。

工業高校や商業高校についても、地域の人や産業界に支えられた様々な取組が一層大切になってくるでしょう。

魅力ある職業人を育てるために、県内の自然や素材を生かし、県内の人材を活用し、生きがいを持って将来を展望できる人材を育成することが望まれます。

3 社会と人間

自分を磨く 自然と生きる 人と出会う -

人がこの世に生きるということは、自分自身の存在を自覚し、他者と出会い、気づきを行いながら、未来に向かって歩む、ということでしょう。

この「人としての歩み」はその生涯にわたって続く道ですし、その中で人間は自分を作り上げていくのです。人の「歩み」が長くなる高齢社会では、「人づくり」は一生にわたる長い道のりですが、それを支えるために県民が手を取り合い、行政もそれを支えるためにはどうしたらいいのでしょうか。

その基本となるところを

(1) 自分を磨く (2) 自然と生きる (3) 人と出会う

の3つの柱を立てて考えます。

この場合、人がその中で「生きていくところ」としての地域づくりは、学校教育、家庭教育に必要不可欠な条件です。地域・学校・家庭の間には相互の乗り入れが必要でしょう。その中で人は自分を作り、自分を生かし、また他者からも生かされることになるのです。

(1) 自分を磨く

生涯にわたる学習はまず、一人一人の自主性に基づいて、互いに助け合いながら「自

分を磨く」過程です。静岡県は、そのために必要な、地域を巻き込み、コミュニティを再生する条件を持っています。大都市部のように一極集中ではなく、東・中・西部の3地域がそれぞれの特性を持っています。過疎地もありますが、「これ一つ」といったそれぞれの特性を持っています。地縁、人脈のネットワークは強いし、明るい静岡の自然があり、自然とのふれあいができます。

このような地域との連携が可能であるという条件を生かし、生涯学習の基地として「養之（ようし）大学」を設置したらどうでしょうか。漢書の「養之如春」（之を養うこと春の如し）にちなんで名づけるもので、春が万物を育てるように志や人格を養う新しい形の大学を目指します。また、この大学は、学ぶこと、教えることを通じて、県民が「生活の質」（Quality of Life）を高めるための場所であり、既存の公民館活動や生涯学習に向けた活動などとネットワークを組んで機能することもできます。

大学の目指す基本的な考え方には

人生への再挑戦を支える「セーフティ・ネットのための大学」

ともに学び、人との結びつきを深める「ヒューマン・ネットのための大学」

の2つがあります。

セーフティ・ネットのための大学

セーフティ・ネットとは、人生の中で“学歴”それも青少年期のある時に決められた学歴だけがその人の一生の命運を左右するというのではなくて、自分がその気になれば、自分をいつからでも磨くことができる機会を作る、ということです。単に一般教養を身につけるだけでなく、専門性を高めたり身につけることができるようにします。

この大学では、

- (a) 中高齢者や定年退職者に対して、人生の第2ステージの始まりをより豊かにします。
- (b) 経済・社会・文化状況の変化に応じて、個人の能力を高めたり、新しい人生のやり直し、踏み出しを助けます。

また、専門性を高めるとは、情報社会等に生きるための技術を習得するだけでなく、例えば環境問題や資源リサイクルを考え、21世紀の社会に「役立つ人」を作ります。さらに「人が人を助けるための技術」を学ぶこともできるようにします。「豊かに生きる」ためには、盆栽や釣りをテーマにしても、文化論から木や水の持つ生命科学まで学ぶことができるでしょう。

この新しい大学は、そこで学んだ高齢者や心身にハンディキャップを持った人たちが地域や職場に参加する、生き生きとした、しかもお互いを尊重し、助け合うという心のユニバーサルデザインの考え方に合致した社会を創り出します。静岡県は、社会解体が進行する21世紀の社会の中で、人々のつながりを保つことができたという誇り高い実績を持つことができるでしょう。

ヒューマン・ネットのための大学

ヒューマン・ネットとは、「学ぶこと」の持つ人と人とを結びつける機能に着目し、これまでの生涯学習などの活動の成果を生かし、また、高めるものです。

この大学では、

(a) 地域や職域及び家庭での対人的な能力を高めます。

地域リーダーとしての人間的能力を磨くということを目指すものです。

親になるための「親業」的教育、職場での心の健康を向上させるための当事者・リーダーの教育や心理療法としての交流分析、構成的エンカウンター法、カウンセリングなどのやり方もその中で学びます。

* 交流分析：自分の感情を表現し、自分の考えを決断する過程で自分と相手の心の動きに気づくカウンセリングの方法

* 構成的エンカウンター法：相手の心を読み取り、自分の気持ちを相手に伝えるためにグループで行う訓練方法

(b) 「若いうちにもっと勉強すればよかった」とか「勉強し忘れた」という心残りがあるような人が、現在の内的欲求に基づき自分を磨きます。

その中で、人との「縁」を作り、お互いに協力して「縁」を広げます。

この新しい大学は「教える」ための「上からの教養や教育」の大学ではありません。主体性を大事にし、相互に教え合い、学び合う場所です。従って、学長は公募、教師も意欲の高い人を公募します。学びたい、教えたい人たちがわいわいと集まって、お互いに役割を変換しながら、学びながら向上する場所です。

大学のお世話をする部門は、人々の間のつながりを作り、そのために必要な情報を提供し、学ぶ「空間」を創出することを第一にします。設置する場所は、海辺や山辺など、自然とのふれあいのある場所がいいのではないのでしょうか。

(2) 自然と生きる

新しい大学では、その中で人々が自然とのふれあいを取り戻し、自然と環境を大事にする、ということを目指します。そして、地域における環境の保護活動のためのキーステーション、または情報センターの役割を果たします。豊かな太陽と海と水と森林という財産を十分に生かすために、自然とふれあい、自然を学び、自然を生かし、保持するという機会を県民のすべてに提供する契機を作ります。

また、このような目標は、世代を通じて人々の「こころ」を通じあう、という方法で達成されます。例えばボランティア活動を仲立ちにして、子どもたちは自然とふれあい、大人たちも共に遊び共に学ぶことができます。このような活動を通じて、不登校や引きこもり、非行などの子どもたちの問題も、さらにストレスにさらされている大人たちの心と身体の問題もかなり解消されることが知られています。病気にとりつかれた場合でも、自然とのふれあいの中で人生を充実させ、心身の機能を活性化させることで、時に悪性腫瘍のような場合にさえ、予後が改善されることが知られています。

自然を通じての“癒し”の“塾”というものも考えることができます。「セーフティ・ネットのための大学」のための基本的な考えには、「自然の中での」または「仕事を通じて」、非行・薬物依存などによってつまづいてきた若者たちが自分を取り戻し、新しい人生を踏み出すための第一歩としての「塾」という形態を含めてもいいのではないのでしょうか。

(3) 人と出会う

地域を通じて、人と出会い、支えあい、まさに感動の体験をもつ、ということは伝統的に日本の文化の中での人づくりの基本でした。

地域の伝統芸能や「祭り」の中で、人々は、お互いに出会い、祖先や神々に出会い、そこで「畏敬の念」を体験し、作法や対人的な礼儀を学んできたのです。特定の宗教や儀礼にかかわるのではなく、人々が住んでいる地域に伝えられてきた「ふるさとの伝承」を復興し、生き生きと伝えていく中で、世代を超えた人々のつながりと教えあいが生まれます。

日本民俗学が私たちに教えてくれるところは、日本人は、現実と労働の“ケ”(日常)の時間・空間と、“カミ”との出会いと非日常を体験する“ハレ”(祭り)の時間・空間を巧みに往復することで、心の健康を保ち、心身ともに活性化してきた、ということです。この“ハレ”の時空間を、都市空間を含めて、できるだけ多くの人々に体験する機会を作ることは、地域の活性化、人々の元気につながります。それには、若者を惹きつける地域でのイベントの工夫が必要であり、若者文化と伝統文化はそれぞれに、あるいは手を組んで活性化される必要があります。そのための“場”または発信基地として、新しい大学は役立つでしょう。

さらに、集団的な人と人との最善の仲立ちは「笑いとユーモア」です。職場、学校や家庭での笑い、それも他人をいじめるような笑いではなく、一緒に笑えるような笑いは、人々を元気づけて、ストレスに対する抵抗力を高め、創造力を高めます。教育の中で、社会の中で、例えば「県民笑いの日」を作ったらどうでしょう。

そのような工夫によって、世代を超えた地域の人々が出会い、支えあい、共通の感動体験を持ち、地域が、単に経済的にだけでなく、文化的、人間的なつながりによって活性化されれば、地域の“大人たちが”、地域の子どもたちや若者の行動に日ごろから気を掛け、「声かけ」を行って改善させることができます。さらには、大人たち自身の行動を律することにも役立つでしょう。

むすびの言葉 順序と時間のために

私たちが考える「意味ある人」とは「何かができる人」「精神的に自立している人」「思いやりのある人」、この3条件をそなえていることを目指しています。

そのために、「家庭」「学校」「社会」で何が欠けているか、何が出来るかを考えることから出発しました。そして、「意味のある人」が誕生するためのシステムと装置をできるだけ具体的に、そして総合的に提言するという形をとりました。

あるいは、総花的にすぎる、理想的でありすぎると受け取られるかも知れません。しかし、人間は多様です。その多様性が生かされてこそ社会は活性化し、楽しいものになります。多様性の前にひるみ、多様性を避けてとおらずに、真正面から取り組んでみましょう。

そのための課題は、順序と時間です。どこから手をつけてゆくかは、県内の地域社会の特性と相談づくできめていったらどうでしょうか。その際、大切なことは推進の主体はあくまで地域社会であって、地域社会の有識者でグループをつくり、まず、何から始めるかを討議し実行に移すのですが、その際、行政はあくまで助産婦役であることが望ましいのです。

私たちは、計画を樹てるとそれが実現されるための必須条件として「5年」とか「10年」というように時間を区切ってしまいます。土地の整備や建物の建設はそれも必要でしょうが、「人づくり」はそうはゆきません。人が人の成長に手を藉す（かす）のだから試行錯誤はあたりまえです。

そこで必要なのは「各駅停車方式」です。ひとつのプログラムをやってみて、不都合や差し障りが起こったら、プログラムを先に進めず、立ち停って考え直してみる。うまくいっている地区を見学したり、周囲の人たちの意見を聞いてみる。そのうえで路線を修正し、先に進むことが必要だと思います。

「人づくり」には、時間をかける、あるいは時間がかかると考えるのはおかしいのであって、最初から時間を考えずに取り組むという態度の方がよいと思われます。なぜなら、あまり時間を意識すると、「時間」のために「人づくり」をするという本末転倒の結果になるからです。

「静岡県では、どこの町もどこの村も、しょっちゅう“人づくり”の話をしているよ」という噂が全国に広がることこそ、私たちの願いです。日本じゅうから「人づくり・静岡ソフト」を求めて人々がやってくることを、願っているのです。

発行日 平成11年10月20日

発行 静岡県企画部

問い合わせ 〒420-8601 静岡市追手町9-6

静岡県企画部大学室 電話 054-221-3304

FAX 054-250-2384